

# 四天王寺の慶長再建について

《キーワード》 荒陵山、豊臣秀吉、豊臣秀頼、寺社再興

木村 展子

はじめに

荒陵山四天王寺は聖徳太子の創建になる、日本有数の歴史を誇る寺院である。『日本書紀』には推古天皇元年（五九三）に創建されたと記され、伽藍の発掘調査でも飛鳥時代の瓦が寺域全体から多数出土していることから、飛鳥時代の早い時期に創建されていたことは間違いない。しかし、度重なる災害や戦乱により幾度も堂塔伽藍は灰燼に帰した。その都度復興されたものの、その造営の内容や経緯に関しては未だ不明なことも多い。本稿では特に近世初期、豊臣秀吉・秀頼によって再建され、慶長五年（一六〇〇）に落慶供養が行われた伽藍について考察したい。残念ながら慶長再建時の遺構は現存しておらず、造営文書の類もほとんど残っていないが、わずかなではあるが遺品や古文書類、さらには境内の発掘調査結果を手掛かりに少しでもその概要を明らかにしたい。

## 一．四天王寺造営の歴史

四天王寺の歴史は罹災の歴史と言っても過言ではない。それほど幾度も焼亡・倒壊と再建を繰り返してきたのであるが、特筆すべきは寺域がほとんど変動せず、なおかつ建築のほとんどが同一の場所に再建されてきたことである。それゆえ、造営の歴史をたどることは慶長期の伽藍を考える上でも重要である。

創建が飛鳥時代であることは前述したが、寺観が整うのは奈良時代前期までまたなければならぬ。五重塔・金堂・中門は創建時に完成していたと考えられるが、講堂と回廊の建立は奈良時代まで下ることが発掘された瓦より判明している。

その創建伽藍は、平安時代の承和三年（八三六）に雷のために塔が破損し、天徳四年（九八〇）には火災によって全焼している。これが文献上で判明している最初の大規模な罹災である。しかし間もなく撰関家などの援助のもと復興され、その後も、四天王寺別当に

なつた覚猷や鳥羽上皇、後白河法皇などによって伽藍はさらに整備されていく。この時期に創建された堂宇も多く、念仏堂、五智光院などが造営される。十二世紀後期における四天王寺の伽藍の様子は、九条兼実の『玉葉』文治三年（一一八七）八月二三日の条に載る四天王寺指図と当日の記述によりある程度判明する。<sup>3)</sup>

中世に入ると、まず十二世紀中ごろに倒壊したままであった絵堂が、貞応三年（一二二四）別当である慈円によって再建される。<sup>4)</sup> 十三世紀末には忍性によって真言院（現在の勝鬘院）が創建され、西門の鳥居が木造から石造に改められる。<sup>5)</sup> しかし、康安元年（一三六〇）には地震のため金堂が倒壊、<sup>6)</sup> 嘉吉三年（一四四三）には太子殿・御影堂・回廊・三昧堂・鎮守社などが焼失、<sup>7)</sup> さらに応仁・文明の乱では大内氏の軍勢によって放火されている。<sup>8)</sup>

近世に入り、天正四年（一五七六）に石山本願寺と織田信長が戦った石山合戦の際に伽藍が焼亡する。<sup>9)</sup> その後、豊臣秀吉・秀頼の二代にわたって再建されるが、それも再び慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣で灰燼に帰す。<sup>10)</sup> やがて徳川秀忠によって元和九年（一六二二）に伽藍全体が再建されるが、<sup>11)</sup> 享和元年（一八〇一）に落雷のため五重塔、金堂をはじめ主要な堂宇を失ってしまう。この時は大坂白銀町の町人淡路屋太郎兵衛が中心となって広く勧進し、文化十年（一八一三）に竣工した。<sup>12)</sup>

近代になり、明治政府の推し進めた廃仏毀釈のため寺勢は衰退を余儀なくされるものの、文化再建の諸建築は命脈を保ち、その姿はわずかに残る当時の写真によりうかがうことができる。ところが昭和九年（一九三四）、近畿を襲った室戸台風によって五重塔と中門

が倒壊し、金堂は大破する。ただちに再建に取り掛かり、昭和十五年（一九四〇）までに五重塔・中門・東西回廊の落慶供養が行われたが、<sup>13)</sup> それもすべて昭和二十年（一九四五）の大阪大空襲によって金堂・講堂・太子堂などと共に焼失してしまう。

戦後、大がかりな復興事業が始まる。昭和二十五年（一九五〇）より始まった第一期事業では太子殿・英霊堂・北鐘堂・南鐘堂・東西薬舎など、続く昭和三十一年（一九五六）よりはじまった第二期事業では中心伽藍、すなわち五重塔・金堂・講堂・中門・東西回廊などが再建され、第三期事業ではすでに再建されていた太子殿を除く聖霊院全体の復興が行われた。いずれの復興事業の際にも前段階に発掘調査が行われ、大きな成果を上げている。

## 二、天正の焼亡と豊臣秀吉の再建着手

天正四年（一五七六）五月、織田信長は石山本願寺と戦った際、四天王寺の伽藍に放火し、その上寺領を没収した。吉田神社の神主、吉田兼見の日記である『兼見卿記』によると、五月四日に信長勢は天王寺にて顕如ら本願寺勢と戦い敗れるが、翌五日に信長が出陣し、七日には本願寺勢を撃破する。このとき二千余りの兵が捕縛されたという。四天王寺側の史料である『天王寺誌』<sup>1)</sup>には「織田信長放火伽藍、闕所寺領」、「秋野家譜」には「織田信長公放火于伽藍、没収寺領」と信長方の放火であると記すが、醍醐寺三宝院の義演の日記である『義演准后日記』慶長四年十一月十五日の条には「前年一向衆信長卿度々及合戦、于時為一向衆不残一字焼払了」と記され、本

願寺側の放火であると伝える。どちら側が放火したかは明らかではないが、石山合戦の際に四天王寺が焼失したことは間違いなく、天正四年五月十日に正親町天皇が再興に尽力を図るように四天王寺の執行に命じた論旨が残る。<sup>15</sup>この時の被害の状況は明らかではないが、豊臣秀吉が四天王寺再建を計画して記した「四天王寺造営目録」には、中心伽藍をはじめ主要な堂宇が列挙されていることから、相당한被害を受けたものだと考えられる。

天正四年に焼亡後の再興の経過は明らかではないが、いくつかの秀吉の朱印状やその他の文書が四天王寺に残る。(便宜上番号を付けた)

①「豊臣秀吉書状」(二卷 大阪市指定文化財)

当寺観音堂江

大政所為寄進寺

領百石遣之候目録

別紙在之全可被

寺納候也

天正十六

三月廿日 秀吉(花押)

天王寺

教伝院

②「豊臣秀吉朱印状」(一卷 大阪市指定文化財)

当寺被遣之

米五千石之事

其方請取造営

可精入事

肝要候也

六月廿二日(朱印)

天王寺

秋野

③「豊臣秀吉朱印状」(二卷 大阪市指定文化財)

平群郡ぬかたへの

塔被為取候然者

当国之人足家並

申付石田木工申次第

罷出ぬかたへより

天王寺迄一掃持届

即石田木工頭三可相

渡候也

七月十日(朱印)

和州

代官給人中

④「四天王寺造営目録」(二卷 大阪市指定文化財)

天王寺惣寺中

千

木のかみ

一、金たう いま一ちうあけ申度候

二五百 但二けんま

一、かうたう 五けん七けん きのかみ

二五百

一、御太子たう 一のかみ

二五百 二けんま はりま

一、六したう 六けん七けん

千 同

一、志きたう 三けん七けん

三千 五千石

一、たう 三けん四はう もく

千 一のかみ

一、二わうもん 五けん二けん

千

一、南大もん 五けん はりま

一、西もん

、、、、、、

千

一、まんだういん 五けん く きのかみ

五百

一、しゆる もく

千

一、くもんしたう 一のかみ

「文禄三年甲午某月

豊臣秀吉公欲再興荒凌山天王寺而召亨順

法印号秋野来迎院先記諸堂広狭高下間数親自

染筆條下書修造奉行之姓名以賜亨順是

乃其條書也書中所謂紀伊守者浅野弾正

小弼長政市正者片桐且元播摩守者小出秀

政木工頭者石田正澄也石田治部少輔三成兄嗚呼時移事

変今存此両筆觀物思人恐有紛失是故修

補以為之跋云爾

延宝二年龍輯甲寅

冬十一月涓吉 秋野本順書」

(「」は異筆)

この他、東京大学史料編纂所所蔵の「秋野家伝証文留」に以下の  
ような文書がおさめられている。<sup>16)</sup>

⑤「豊臣秀吉朱印状写」

天王寺太子堂為奉加、一並錢  
五百貫文遣候間、其津地子錢  
被納候を彼寺へ可被相渡  
者也、仍如件

天正十一

七月十一日 秀吉判

宮内卿法印

⑥「勸進文写」

勸進沙門 敬白

特請蒙貴賤道俗助成、营造撰津国四天王寺仏閣、祈国家安全  
状

夫惟、伝仏法於日域、施利益於吾朝、大悲利物之善功、聖德太子方便也、(中略) 天正四年五月三日、不図為兵火災、宝塔露盤雜塵芥、金銅救世觀音登銅煙、三面僧坊一時頓滅、見之者湿袖、聞之者斷腸、爰羽柴筑前守秀吉朝臣、達武将深智略、而暴逆之輩速疾誅罰、御国家以仁寿之化、撫民屋以憲章猷、択賢良輔治、用善哲撰政、加之欲興隆仏教、紹耀玄風、頻驚当伽藍再興之計策、遮而為大壇主可加下知諸国云云、(中略) 若以一塊一塵抛入此場、如此等者、結縁一浄土云云、御願深重也、寧虚妄乎、然則信心施主、現世安穩、後生善処、得益無疑、仍勸進状、如斯

秋野来迎院法印

天正十一年十一月日

亨順 朱印

以上 六通が秀吉の四天王寺造営に関連する文書である。

①は天正十六年三月二十日付で、秀吉の母である大政所が教伝院に対して観音堂に百石の所領を寄進するというものである。教伝院という子院は他の記録には見えず不明である。川岸弘教氏はこれを敬田院とする。<sup>17)</sup>

②は年紀不明の六月二十三日付の朱印状である。秀吉が四天王寺へ米五千石を遣わし秋野坊へ造営に精を入れるように命じたもの。『大阪市所在の古文書・典籍 四天王寺秋野坊文書について』では文禄三年以降、『天王寺誌』では天正十一年、『四天王寺年表』では天正十七年とする。

③は年紀不明の七月十日付の朱印状である。大和の代官給人に対してあてた書状で、石田正澄の指示に従って平群郡額田部にある塔を四天王寺に移建するように命じたものである。赤松俊英氏<sup>18)</sup>や川岸宏教氏はこれを文禄三年のものとする。

④は年紀不明の「四天王寺造営目録」である。豊臣秀吉が堂塔ごとに担当奉行と建物の規模を記したもので、別紙に書かれた跋には、文禄三年(一五九四)秀吉が諸国勸進を終えた秋野坊亨順を召して諸堂の間数書を提出させ、自ら筆をとって各堂宇の再建用の石数と作事奉行を書き加えたと記されている。但しこの跋は秋野坊本順が延宝二年(一六七四)に記したものである。

本紙には金堂・講堂・太子堂・六時堂・食堂・五重塔・仁王門・

南大門・西門・万塔院・鐘樓・求聞持堂の十二棟について、再建に必要な費用と担当奉行について記されているが、このように各建物で担当の奉行を決め、持ち場に専念させて競わせることにより、工事の組織化と迅速化を図るのは、秀吉が天正十四年（一五八六）十月に田中八右衛門に出した聚楽第作事に関する朱印状にも見られる<sup>20</sup>。また、文禄元年（一五九二）の肥前名護屋城作事でも殿舎ごとに担当奉行を決めて割普請を行っており、秀吉特有の作事形式である。ところで書き込まれた奉行名のうち、金堂・講堂・万塔院を担当する「きのかみ」は、『大阪市史』では青木近重、跋では浅野長政とするが、秀吉の従兄弟に当たる青木一矩の可能性がある。他は跋通り、「もく」は石田正澄、「はりま」は小出秀政、「一のかみ」は片桐且元である。五重塔と鐘樓を担当する石田正澄は石田三成の兄で、③の朱印状にその名が見え、額田部の塔の移建にも関わっている。六時堂・食堂・南大門担当の小出秀政は、天正二十年（一五九二）に堂塔再建の資金を集めるための勧進能興行に際して四天王寺へ禁制を与えている<sup>22</sup>。太子堂・仁王門・求聞持堂担当の片桐且元は秀吉没後、秀頼が行った一〇〇件近くの寺社再興の多くに作事奉行として関わっており、この後豊臣家の寺社造営の中心人物となる。なお、石田正澄が木工頭に叙任されるのが文禄二年（一五九三）であるから、この文書はそれ以降のものということになる。

⑤は天正十一年七月十一日付で、宮内卿法印（松井友閑）に撰津の地子銭より四天王寺の太子堂に寄付をせよと命じたものである。

⑥は天正十一年十一月付の「勧進文」で、秋野坊亨順が秀吉を檀越として再興をはかる旨の勧進文である。

一方、奈良興福寺の塔頭、多聞院で書かれた日記である『多聞院日記』には、四天王寺再建の記事が散見する。天正十七年（一五八九）四月四日の条には「天王寺五重塔関白殿ノ北政所ヨリ可有建立トテ、法隆寺ノ塔ノ指図写二天王寺ヨリ番匠来云々」とあり、この時点では法隆寺の塔を参考にして新造するつもりであったことがわかる。また、天正十二年（一五八四）には金堂がすでに建立され、本尊の救世観音を造立するために絵を描かせ、天正十三年（一五八五）には四天王寺講堂の建立にあたって、本尊阿弥陀を紙に描かせたという記事があり、本尊の造立事業も始まっていたことをうかがわせる。

これら文書史料と『多聞院日記』を合わせて考察すると、④の「四天王寺造営目録」の五重塔の費用が、他の堂宇と比べ五千石と突出していることは注目に値する。これを額田部から移建するための費用と考えるには高額すぎ、新築費用とみるべきである。額田部の額安寺からの塔の移建は、その後秀頼の時代になってから実現しており、③の書状は造営目録より後に出されたものと考えるのが妥当であろう。『多聞院日記』にもあるように、少なくとも天正十七年から文禄二年までは、塔は移建ではなく新築される予定だったのである。また、金堂の条に「いま一ちうあけ申度候」というのは、その当時すでに単層で建立されていた金堂を重層に変更するということだと考えられる。だからこそ、重層であるにもかかわらず、造営費用が千石でまかなえたのだろう。講堂・六時堂・太子殿の再建費用が二百五十石と建物の規模が大きいにもかかわらず少額であるのも、これらの堂宇はほとんど完成していたからではないだろう

か。

天正十一年以降、秀吉による大坂城下町建設がすすめられるなかで、⑥の秋野坊亨順の「勸進文写」に見られるように、寺家を中心に自力復興のための資金集めと再興工事が進められていた。秀吉は天正十四年に方広寺大仏殿作事が始まってからは他の寺社の造営を禁止し、<sup>24</sup>四天王寺にも①や⑤の朱印状に見られるように少額の寄付しか行っていないので、深くは関わっていないのであろう。しかし、自力復興の進展は未だ塔が再建できないなど、それほど芳しくなかった。そこで文禄二年に方広寺大仏殿が上棟して一段落した秀吉が再興に本格的に参画して記したのが「四天王寺造営目録」である。②の朱印状も五千石という金額から、「造営目録」が書かれた前後に出されたと思われる。そして四天王寺の再興は本格化するのである。

### 三、豊臣秀頼の四天王寺再興

慶長三年（一五九八）八月十八日、秀吉はその生涯を終える。秀吉は大坂城、伏見城、聚楽第などの城郭、方広寺や天瑞寺などの寺院などを創建し、東福寺や醍醐寺など数多くの寺社の修造を行った。嫡子の正二位権中納言である豊臣秀頼はまだ五歳であったが、秀吉の遺業の継承として秀吉が着手していた寺社の再興を引き続いて行<sup>25</sup>う。四天王寺も例外ではなく再興事業は秀頼に受け継がれ、慶長五年（一六〇〇）三月二十七日に落慶供養が行われる。その様子について醍醐寺の義演は「従秀頼卿悉御再興、驚目了。仏法最初霊寺、

復旧儀珍重」と記し、<sup>26</sup>やや後の慶長十年（一六〇五）の記録になるが、相国寺の僧である鶴峯宗松は伽藍の様子を「此次天皇寺金堂、奇麗輝朱甍、照綉瓦、驚凡眼而已、片主奉行ト云々」と記している。<sup>27</sup>しかし、残念ながら秀吉の作事にかかわる文書は一通も残っておらず、また、この時に落慶供養された堂宇も、大坂冬の陣で全焼したとみられ一棟も残っていない。それどころか慶長以前の建造物は石鳥居を除いて一棟も現存せず、いかに大坂冬の陣での火災が壊滅的なものであったかがわかる。

ただ四天王寺の子院である勝鬘院の、「慶長二丁酉歳春午日再工／総棟梁金剛匠／治工大谷三郎正次以下／二十一人相輪組立」という銅板銘から慶長二年（一五九七）建立と考えられている多宝塔一基が残る。<sup>28</sup>しかし、秀吉・秀頼による再建であるという一次資料はなく、心柱継手からは「元和四年庚申九月十日／御奉行片桐主膳正」という墨書が見つ<sup>29</sup>かっている。その建築様式は、三間四方で初重は円柱、組物は出組、中備は幕股、二重目は、組物は四手先、本瓦葺、内部は四天柱に來迎壁を設けその前に仏壇を置く。天井には折上小組格天井を張り、内部全面に十二天像や装飾文様を描く。全国でも最大規模の多宝塔であり、幕股に十二支を入れるのが特徴的である。また、二重目の組物を肘木・尾垂木などほぼすべてを禅宗様とし、初重脇間の柱間装置を花灯窓とするなど禅宗様色が強い。ところで、十二支の彫刻を入れた幕股は近世初期以降に見られ、慶長二年の建立であるとすれば勝鬘院多宝塔はそのもつとも早い例である。その後の十二支の彫刻を入れた建築は、圧倒的に徳川氏の造営になるものが多い。十七世紀の建築に限っても、慶長九年（一六

○四)の瑞巖寺五大堂こそ伊達政宗の建立であるが、慶長十三年(一六〇八)の本門寺五重塔は徳川秀忠、元和五年(一六一九)の二荒山神社本殿も徳川秀忠、寛永十三年(一六三六)の英勝寺仏殿は家康の側室英勝院、寛永十六年(一六三九)の寛永寺五重塔は土井利勝が建立したが、寛永寺はいまでもなく徳川家の菩提寺である。寛永十九年(一六四二)の南宮神社高舞殿は徳川家光、元禄六年(一六九三)の西福寺三重塔は家光の長女千代姫の建立となっている<sup>30)</sup>。一方、豊臣秀頼造営の寺社の中には十二支の彫刻をもつものは一棟もない。これらを考えると、勝鬘院多宝塔は心柱墨書にある元和四年(一六一八)に徳川氏によって再建されたものであると考えるのが妥当だと思われる。

ところで、四天王寺では幾度か伽藍の発掘調査が行われている。まず昭和九年(一九三五)に室戸台風で五重塔と中門が倒壊し、金堂が大破した際に、天沼俊一氏が五重塔心礎・中門跡・金堂周辺を調査したのが最初である。その後、昭和二十年(一九四〇)の大阪大空襲で中心伽藍を含む寺域の三分の二を焼失するが、中心伽藍の再建に伴い、昭和二十五年に講堂跡、昭和三十年から三十二年にかけて大規模な発掘調査が行われた。その後も聖徳太子奥殿建設(昭和五十三年)や隣接する四天王寺学園の校舎建設などに伴って小規模ではあるが何回かの発掘調査が行われている。一方、堂宇の規模などに関する文献や絵画資料には、古代では『太子伝古今目録抄』に引用される「大同縁起」(八〇四)、「四天王寺縁起根本本」(一〇〇七頃 一卷 国宝 四天王寺蔵)、中世では「一遍聖絵」(一二九

九 十二卷 国宝 清浄光寺・歆喜光寺蔵)、近世の慶長再建時の資料としては前述の「四天王寺造営目録」、元和再建時の資料としては「天王寺御建立堂宮諸道具改渡帳」(一六二三 四冊 四天王寺蔵)、『愚子見記』(寛文年間の修理の記録も含む、十七世紀後期)、『撰津名所図会』(一七九六〜九八)、「四天王寺元和再興絵図」(一幅 四天王寺蔵)、「撰津国四天王寺図」(三幅 四天王寺蔵)、文化再建時の資料としては「堂社并寺院 新古建物間数書」(一冊 四天王寺蔵)、「四天王寺諸堂間数書」(二冊 四天王寺蔵)、近代以降に撮影された写真などがある。次に、これら発掘調査の結果と文献・絵画資料をあわせて、慶長再建時の建築について検討したい。

まず、慶長再建の範囲を検討する。発掘調査では、飛鳥時代から江戸時代に至る多くの瓦が発見されているが、それらの中で間違いなく慶長再建時の瓦であると判明するのは、元和再建とほとんど時を隔てていないことから様式的な差がなく、あまり多くない。その中でも確実なのは桐文の瓦であり、新納骨堂裏、講堂跡、旧短声堂付近で発見されている。また、秀吉・秀頼の四天王寺再建工事に瓦を供給していたことが判明している和泉町瓦窯の瓦と同形式の天の字のある軒丸瓦が、現在の太子奥殿の位置にあった用明殿裏から出土している<sup>31)</sup>。これらの瓦の発掘結果と先の「四天王寺造営目録」に記載される堂塔を合わせると、文禄・慶長の再建は中心伽藍を含めた寺域の南側三分の二に達することがわかる。

次に発掘調査が行われた建築を「発掘調査報告書」などから個別に検討する。

### ①中門

創建当初は正面三間・側面二間の小型の門であったが、天徳四年の火災で失われたようである。その後いつ再建されたかは不明であるが、藤原道長が参詣した治安三年（一〇二四）までには再建されていたという。楼門形式で天正四年に焼失するまで存続していた。しかし、慶長再建時には変更され、正面五間・側面二間、重層と規模が大きくなる。元和再建時これを踏襲したが、文化再建では正面五間・側面二間であるが楼門とし立面を簡略化している。

### ②金堂

天徳火災以前の金堂は「大同縁起」に「二重金堂一基」とあることから屋根が二重であったことがわかる。天徳以降は「四天王寺縁起根本本」に「金堂壹宇 二重 瓦葺」とあることから、やはり屋根は二重であったと考えられる。鎌倉時代、「一遍聖絵」の巻八には西から見た四天王寺が、巻九には南から見た四天王寺が描かれるが、金堂はいずれも基壇の上に建ち、二重・瓦葺で上層は入母屋造である。巻八では下層は正面五間・側面四間で、上層は正面五間・側面二間、巻九では上層が正面三間・側面四間になっていることが異なる。「絵巻事」という言葉を持ち出すまでもなく、絵画資料には、誇張や省略等の限界があり細部に関する異同は致し方ないが、いずれにせよ金堂が重層であったことは間違いない。元和・文化の再建金堂も文献・絵画資料より重層であったことが判明しており、古来より金堂は重層とすることが伝統であったと思われる。「四天王寺造営目録」の記述と合わせ、慶長再建の金堂も重層であったと考えられる。そして、「四天王寺元和再興絵図」や写真によると元

和・文化再建の金堂はいずれも正面五間・側面四間に裳階を廻らせている。発掘調査では文化再建時の基壇と、慶長・元和再興時の基壇の規模は変化しておらず、特に元和再建時には慶長の礎石をそのまま用いており、慶長と元和の金堂は同規模・同立面であったと考えられる。

### ③講堂

発掘結果から少なくとも四回再建されていることが判明している。創建講堂に関しては南西隅の軒がそのまま埋没して、木部は腐朽したものの雌型を作っており扇垂木であったことが知られるが、一緒に落下した瓦の中に平安時代初期のものが含まれており、平安時代に暴風によって倒壊したと推定されている。その創建講堂は、「四天王寺縁起根本本」に「夏堂四間、（中略）冬堂四間」とあることから八間堂であった可能性が高い。その後天正焼亡までに時期は不明であるが、正面九間・側面七間で前方に孫庇を付けた形で再建されている。慶長再建時の講堂は正面七間・側面五間とし、堂の総面積は縮小されているが柱間は広くなっている。元和再建時の講堂はそれを踏襲しているが、文化再建時には、元和年間に建てられた万塔院を仮堂として移築し、昭和二十年（一九四〇）の戦災で焼失するまで存続した。

### ④回廊

基壇は創建時の位置からほとんど変わっていない。

### ⑤南大門

創建当初は三間門であったが、天徳焼亡後、「四天王寺縁起根本本」が発見される寛弘四年（一〇〇七）以前に五間門に改められた

と推定される。それから天正焼亡までの状況は明らかでないが、慶長再建時には前代の規模を踏襲し、正面五間・側面二間としている。元和再建の門は慶長と同規模で重層・入母屋造である。

#### ⑥ 食堂

食堂は現在は失われているが、昭和二十年に戦災で焼失するまで六時堂の北側に建っていた。創建時期は明らかでないが、天徳四年に焼失した食堂は正面三間・側面四間、その後再建された食堂も同規模であることが判明している。その後、室町時代に一度再建されるが、天正四年に焼亡する。慶長再建と元和再建の食堂は同じ基礎上に作られており、ほぼ同規模であり、正面七間・側面四間で、五間×二間の身舎に庇を廻らせた形式であった。

以上慶長の再建は必ずしも旧規によらないものであったが、少なくとも中心伽藍においては、元和の再建はほぼ慶長の再建時の堂宇の規模を踏襲している。これら発掘結果と「四天王寺造営目録」、「四天王寺元和再興絵図」に記された堂宇の規模を比較すると次のようになる。

	発掘結果	四天王寺造営目録	四天王寺元和再興絵図
金堂	五間×四間	—	五間×四間
五重塔	—	三間四方	三間四方
講堂	七間×五間	七間×五間	七間×五間
六時堂	—	七間×六間	七間×六間
食堂	七間×四間	七間×三間	七間×四間
仁王門	五間×二間	五間×二間	五間×二間
南大門	五間×二間	五間	五間×二間
万塔院	—	五間×五間	五間×五間

発掘結果と「四天王寺造営目録」で異なるのは食堂の梁間であるが、「四天王寺造営目録」の梁間三間というのは異例であり、これは誤記であると思われる。発掘が行われていない六時堂と万塔院でも、「四天王寺造営目録」と「四天王寺元和再興絵図」の規模が一致し、中心伽藍のみならず、他の建物でも全体にわたり元和再建時には慶長再建時の堂宇の規模を踏襲したであろうことが想像される。

このほかの慶長再建時の遺品も建造物や文書と同様非常に少なく、重要文化財の金銅行事鉦と舞楽装束類が残っているのみである。金銅行事鉦には銘文があり、「慶長四曆己亥二月吉祥日」「四天王寺御再興 御舞台 行事鐘」「左近衛権中将 従四位下 豊臣朝臣秀頼」「御奉行 豊臣朝臣 小西式部卿法眼 如清」と陰刻されている。秀頼の官位を従四位下左近衛権中将とするが、実際は慶長三年（二五九八）四月二十日に従二位権中納言に昇進している。従四位下左近衛権中将となるのは慶長二年（一五九七）九月二十九日なので、その間に調進されたが奉納は慶長四年にずれ込んだものであると推測される。事実、『義演准后日記』慶長三年（一五九八）三月二十五日の条には「天王寺供養の由風聞、珍重」とあり、さらに七月二十八日の条にも「伝聞、天王寺供養モ存之云々」、慶長四年八月二十六日の条にも「伝聞、天王寺供養、来月十八又延引云々」と、慶長三年八月十八日の秀吉の死去をはさんで、何度も落慶供養が延期されている。奉行の小西如清は小西隆左の息子で行長の兄であるが、生没年は不明である。また秀頼奉納と伝えられる一対

